

白樺派のカレー

ニュースレター



2014年5月 第2号 <http://shirakabaha.web.fc2.com>

白樺派のカレーにまつわるエピソードやイベントを紹介するニュースレターをお届けします。

立体造形作家・吾妻勝彦氏が語る デザインに込めたメッセージとは？

白樺派のカレー デザインの系譜

今から100年ほど前、白樺派の文人達が千葉県北西部の手賀沼沿いに居を構え創作活動をしていました。そのうちの一人、柳宗悦の夫人兼子さんは、バーナード・リーチの助言を受けた味噌入りのマイルドでおいしいカレーを作りました。

この地域に根ざした歴史と文化を、カレーとともに表すことができる人物は誰なのか？ 白樺派のカレー普及会は、東葛地域を拠点に活動している、立体造形作家・吾妻勝彦氏にデザインの相談をしました。

当時を振り返って、吾妻氏は、「最初のお話をいただいた時、大正時代、我孫子の手賀沼沿いに、エネルギーでユニークな時間があったことを、初めて知りました。最初の依頼は、「試作を重ねてきたカレーが、一般の人にお披露目するところまで来たが、その時に、“ランチョンマット”を作って、より関心を持ってもらいたい。」というものでした。

打ち合わせで渡された紙は、ほぼ真っ白で、自由に考えてみてほしい、ということでした。

最初に考え付いたのは、白樺派の文人達は男性がほとんどでしたし、学習院の出身者たちもいたことから、シェフに“バロン”のような人物像をいれて、当時のカフェを舞台にしたようなイラスト背景をつくったら？というものでした。しかし、カレーを市民の皆さんに親しんでもらうためには、女性のほうが良いのでは？と思うようになりました。実際にも、カレーを作って振



舞っていたのは“柳兼子さん”だったわけですから。

そこで考えた案は“竹久夢二の絵に出てくるような女性”がキャラクターのものでした。当時、夢二本人が、白樺派にかなり関心を持っていたようでしたので、候補に上げました。しかし、普及会のメンバーより、この案は、「夢二の女性にあまりにも似すぎている。」と意見が出て、再検討しました。その結果、自信はあまりなかったのですが、現在のキャラクターに落ち着いたわけですね。こうして主役は決まり、背景で何を表現するかになりました。普及会で一致しているのは、私たちは、今も当時も、手賀沼という存在から、いろんなものをもらっている、ということです。

このことを、ランチョンマットの背景に盛り込もうと思いました。さらに、カレーの材料となる素材のカットも四隅に入れました。カレーは当時“ハイカラな食べ物”だったということで、そんな雰囲気も出したいと思いました。終わってみると、ランチョンマットは、カレーのデザインらしくないもの？になっていました。

ランチョンマット
第一号



吾妻勝彦氏

